

未だ見ぬ君へ

四方松

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夜の鎮守府で、艦娘はノートを開く。  
そこに記された指示を覚えるために。

# 目次

未だ見ぬ君へ

---

1



## 未だ見ぬ君へ

深夜の鎮守府の、艦娘用に誂えられた宿舎。常ならば明かりが落とされているであろう時刻に、ひとつだけ、明かりの漏れる部屋があった。

部屋の主である少女は、ランプを頼りに、一冊のノートを読んでいた。大雑把な字で綴られたノートを繰りながら、彼女はそこに記された指示を読みとつていく。指示の内容は多岐に及び、鎮守府内で遣われるべき口調から、果ては歩く際の足運びまで、詳細に規定されていた。

少女はどうやら、机仕事を得意とする者ではなかったらしい。随分と時間を掛け、ノートの頭から終わりまで目を通すと、目頭を指でもみながら、椅子の背もたれに体重を掛け、天井を仰ぐ。

そして、数秒かけて空気を吸い込み、吸った量に見合った、長いため息をついた。

「あー、これ全部覚えなきゃいけないのか……」

表紙に『覚え書き』と毛筆されたノートを閉じながら、めげるわー、と呟く。すると、ベッドに腰掛けていた少女が苦笑した。

ちら、と目をやると、小柄な少女が微笑んでいるのが見える。

「せやけど、ウチらもフォローするから。完璧にこなさなきゃ、つてことはないと思うよ」

方言混じりの、優しげな言葉が部屋に響く。

椅子に座る少女は更に仰け反ると、半ば背もたれにぶら下がるようにして、背後の少女と目を合わせた。まったくもう、と彼女が苦笑を深めるのを見て、へへ、と悪びれた微笑みを返す。

あまやかな空気が流れ始めたところで、或いはそれを断ち切るように、机に座る少女は表情を引き締め、姿勢を正す。

目線をノートに固定したまま、口を開く。

「……なあ、あんた——龍驤だっけ？ あんたから見ても、今のあたしはどう見える？」  
言いながら、首から上だけで振り向く。

問われた少女の表情に困惑が浮かんだのを見て、率直に言ってくれよ、と念押しする。ややあって、ひとつため息をつく、龍驤と呼ばれた少女は、ぼつぼつと語り始めた。

「……新任の艦娘としては、相当よくできてる方やないかな。怯えも緊張もありすぎないし、何より、置かれた状況にパニックにもなっていない。同じ状況なら、逃げちゃう子だっているし、中には——」

そこまで告げると、龍驤は口を閉ざす。その先に続く言葉を予期して、少女は神妙な

顔をして頷いた。

ありがとな、と呟く少女に、龍驤はどこか傷ついたような表情をしてから、曖昧に笑った。

「ごめんな。嫌なこと思い出させちまったかな」

「ううん、気にしないで。当然の疑問やと思うよ」

部屋を、沈黙が満たす。

暫くして、薄く、儂げに微笑んで、少女は口を開く。

「……そりゃあ、今だって、何でだよ！ とは思うし、納得し切つてると言えば嘘になる。でも、あたしがやらなきゃいけない事なんだろう？」

なら、やるさ——と、少女は呟いた。

自分に言い聞かせるような声色でも、自暴自棄になった者の口調でもない、龍驤は感じた。だからこそ痛ましい、とも。

「立派やね。……本当に、立派」

面食らったような少女の顔に、龍驤は懐かしいものを感じた。

そう、彼女は唐突に褒められることに慣れていなかった。あんなに自信家の身振りをしていたというのに、だ。艦載機の搭載数を自慢しながら、いざ提督に褒められた時、調子が狂ったように二の句を継げないでいる様子を、昨日のことのように思い出せる。

——だが、

「……優しいな、あんた」

返された言葉は、龍驤の予期していたものではなかった。彼女であれば、ここで腕を振り乱しながら照れ隠しに叫んだことだろう。

——少なくとも、こんな風に、素直に返してくることなんて、なかった。

胸中に浮かんだ感傷を振り切つて、龍驤は言葉を紡ぐ。

「……ウチにできるんは、こうやって教えてあげることくらい。根本的な解決なんて、何もしてあげられんよ」

「そんなの、誰だつて無理さ。状況が状況だもんな。そつちじゃなくてさ、あんた、さっきの質問、わざと曲解してくれただろ？」

心臓が止まったような錯覚を、龍驤は覚えた。

——ああ。時々見せるこの聡さに、直截な物言い。

納得と郷愁とが、龍驤の胸を満たす。確かに彼女は変わっていて、でも、彼女は彼女で——。

「さっきの質問、な」

「……ああ」

「やつぱり、違う。違うけど、それでも——それでも、おんなじや」



「提督ーう！ おつ久しぶりー……っつてうわっ！ なーに抱きついてんだよっ！」  
明朝。提督室に乗り込んだ少女は、部屋に入るなり、初老の男性に抱き締められていた。

……足音を聞いて、待っていたのだろう。常ならば執務机に座ったまま来客を迎える彼も、今日ばかりは席を立ち、自分から扉の前に佇んでいた。

「……なんだよ、泣いてんの？ ほらほら、両脚ともちやんと付いてるだろ？ オバケじゃないし、艦怨念でもないって——」

嗚咽を激しくする彼の姿に、言葉は最後まで告げられなかった。

制服の胸を涙で濡らされながら、少女は優しく抱擁を返す。すまない、すまない、と何度も繰り返す彼に、無事だったんだからいいじゃん、と微笑みながら告げる。

見上げた泣き顔をしっかりと見つめて、少女は、

「ほら、もう泣かない。……あたしはこの通り、帰って来たんだからさ」

最初で最後の、そして最大の嘘を、吐いた。

劇的な再会——と先方が認識しているであろう逢瀬から、数分後。

自分の部屋で机に突つ伏す、少女の姿があった。

「……あー。わかつてたつもりだけど、結構くるなー、これ」

言いながら、何度も読み込んだノートを開く。彼女が彼女として振る舞うための方策が所狭しと記述された、今は亡き少女の忘れ形見。

彼の口調から読み取れた彼女への信頼と、——このノートから読み取れた、彼への親愛。その両方を侮辱しているのではないかという想いが、彼女を責める。

だがしかし、賽は投げられた。今更、自分は轟沈した彼女ではありません、などと言えるものか。

「——こんなの書いとくほど、心配してたんだもんな、提督のこと。読み書き、得意じゃなかったらうに」

決して書き慣れているとは思われない歪な文字と、それに見合わない大量の記述とが、書き手の心情を雄弁に物語っていた。いつか自分が沈んだ日のため、自分と同じ—

——しかし記憶を持たない艦娘に彼が絶望しないため、蓄積された虎の巻。

ボディータツチの仕方や食事そのものの癖まで記されているのは、それほどまでに彼女が提督と親しかったことの証左だろう。

「それでも、演じ切るしかない……よな。ま、任せてよ。意外とあたし、やるんだぜ？」

そう呟いて、ノートを閉じる。

席を立てて振り返ると、龍驤が立っていた。

「出撃や。……整理、付いた？」

氣遣わしげな龍驤に、少女は悪びれた笑みを向けると、

「ああ。——軽空母、隼鷹！ 出撃する！」

高らかに、宣言した。

在りし日の光景を幻視して——いや、と龍驤は首を振る。自分まで、過去を透かし見ることはすまい。逝ってしまった彼女と、今ここに立つ彼女と。二人ともが、大切な友なのだ。

「初出撃やね。気張っていこう！」

「おうっ！」

どちらからともなく掲げた手を、高く打ち鳴らす。

そして、少女たちは海へ出る。